

父親の育児行動について (1)

梶原 佳子 松原 由美

The Fathers' Childcare (1)

Yoshiko KAJIWARA Yumi MATSUBARA

Abstract

The purpose of this article was to investigate how fathers were involved in childcare and how they thought about their lives with children. Participants (N=187) in this survey were fathers whose children attended nursery schools. However, most fathers reported that they were taking care of their children, mothers did the main part of actual childcare. They regard their children as the bond of the family, as well as they showed great affection for their children. At the same time, they felt that economic burden occurred and freedom was lost. It was suggested that it was necessary to improve working environment to shortening of working hours in order to promote fathers' childcare.

key words : father, childcare, bond of family, shortening of working hours
キーワード : 父親 育児行動 家族の絆 労働時間の短縮

問題と目的

父親の育児行動については「育児参加」という文脈で語られることが多く、育児や子育ての研究では主に母親の態度やしつけ、母子関係を対象にしたものが中心で(東・柏木・Hess, 1981)、また母親の育児ストレスの軽減には父親の精神的サポートが重要であること示した研究の多くも、父親は母親を通して間接的に子どもに影響を与える存在であることを示していた。つまり、育児は主に母親によって行われていることを前提としており、父親は母親に対して補助的あるいは補完的に育児行動を行うものとして捉える傾向を示したものといえよう。

その一方で、研究も母親と父親との子どもへの関わり方の違い、特に父親との遊びにおける身体的な活動が子どもの社会性に肯定的な影響を与えることや(ペダーセン, 1986)、父親が育児行動を行うことが子どもの認知発達や学業成績の向上や社会的成熟に影響を与えている

など(ゴロンボク・フィバッシュ, 1997; 加藤・石井・牧野・土谷, 2002)、父親の直接的な育児行動が子どもに好影響を与えることや、育児行動において父親は母親とは異なる独自の役割を果たしていることが示唆されている。

また、育児を行うことが親自身にとって人格的な成長・発達を促すことであり(柏木・若松, 1994)、特に父親においては、親になることによる発達は、生物学的に親になるというより、実際の育児に関わることでもたらされるとしている。(森下, 2006)

このように、父親の育児行動が子どもだけでなく父親自身にもよい影響をもたらすことが明らかになっているにもかかわらず、わが国では他の先進諸国に比べて父親の育児休業取得率が低いことが問題となっており、実際に育児の担い手の多くは母親となっている。父親の育児参加を阻む大きな要因のひとつは労働時間が長いことにある。厚生労働省「女性雇用管理基本調査」によると、2004年度では在職中に出産した者または配偶者が出産

した者に占める育児休業取得者の割合は、母親が70.6%、父親が0.56%であった。2002年度での育児休業取得率は母親64.0%、父親0.33%であったので、取得率は増加傾向にあるともいえる。しかし、父親の取得率は実に母親の10分の1以下であり非常に大きな格差が存在している。また、育児休業取得者のうちの男女別割合を見ると、女性が96.1%、男性が3.9%であった。これらの結果から、夫婦に子どもが生まれたときに、両親ともに働いている場合でも、育児は母親が行うのが当然と考えられていることが明らかである。(内閣府、2006)

そこで本研究では実際に父親がどのような育児行動を行っているのかについて父親自身が評定を行うとともに、日本で父親の育児行動を行う割合が低いことなどについて意見を求め、父親が育児行動においてどのような意識を持っているのかを明らかにし、育児が父親にとってどのような意味を持つのか、また父親が積極的な育児行動を行うことを促進する要因について検討することを目的とする。

方 法

手続き：N市内の私立保育園5園に対して通園する園児の父親への質問紙の配布をお願いし、質問紙は一部づつ封書に入れて保育士の先生を通して来園時に保護者の方に直接手渡していただいた。質問紙は無記名で、父親が自宅で父に記入し封筒に入れた上でそれぞれの園に設置したボックスに投函するようお願いした。

調査時期：平成18年8月下旬

回答率：300枚を配布した中で回収できたものは187枚であった。(有効回答率62.3%)

協力者：分析の対象となった協力者の年代の内訳は、20歳代が43名(23%)、30歳代が112名(60%)、40歳代が28名(15%)、50歳代以上が4名(2%)であった。

調査内容：調査の内容について以下はパーセンテージで示す。

(1) 協力者についての基本的な情報は、同居している家族の選択を除いて具体的な数値の記入で回答を求めた。

①子どもと過ごす平均的な時間：一日の中で子どもと一緒に過ごす時間について、寝ている時間を除いて、概算的に数値記入を求めた。

平日では、30分未満が2%、30分以上から1時間未満が8%、1時間以上2時間未満が13%、2時間以上3時間未満が19%、3時間以上5時間未満が34%、5時間以上が26%であった。休日では、1時間未満が5%、1時間以上4時間未満が5%、4時間以上7時間未満が15%、

7時間以上10時間未満が14%、10時間以上13時間未満が31%、13時間以上が34%であった。②勤務時間：勤務時間については、8時から17時が最も多く約半数の52%、7時から16時が16%、9時から18時が13%、6時から15時が3%、その他が14%であった。

③平均的な帰宅時間：帰宅時間は17時から18時が21%、18時から19時が27%、19時から20時が17%、20時から21時が14%、その他が21%であった。

④子どもの人数：子どもの数は2人が最も多く55%、1人が29%、3人が14%、4人が2%で、5人以上は0%であった。

⑤子どもの年齢：子どもの年齢については、0歳から1歳未満の子どもがいる人は9%、1歳代の子どもがいる人は9%、2歳代の子どもがいる人は17%、3歳代の子どもがいる人は15%、4歳代の子どもがいる人は16%、5歳代の子どもがいる人は13%、6歳以上の子どもがいる人は21%であった。

⑥同居家族：同居している家族については、妻と子どもの核家族の割合が82%と最も多く、妻と子どもと夫の親(父、母またはその両方)の場合は11%、妻と子どもと妻の親(父、母またはその両方)の場合は4%、その他は3%であった。

(2) 父親の育児行動と育児に関する意識についての項目は、時事通信社の「父親の育児参加に関する世論調査(2001)、国立社会保障・人口問題研究所の「第2回全国家庭動向調査」(1998)の項目を参考にして用いた。

①育児を含めた子どもとの関わり方について(7項目)、それぞれ「いつもしている」、「時々している」、「あまりしていない」、「ほとんどしていない」の4段階で評定を求めた。

②子どもと生活することで感じることについて(11項目)、それぞれ「いつもそう思う」、「ときにそう思う」、「あまりそう思うことはない」、「全くそう思わない」の4段階で評定を求めた。

③父親が育児に参加することについて、「父親も母親と育児を分担して積極的に参加すべき」、「父親は時間の許す範囲内で育児に参加すればよい」、「父親は外で働き、母親が育児に専念すべき」、「わからない」、「その他」の6項目の中から選択を求めた。

④具体的な育児行動6項目と、「妻に任せている」、「わからない」を含めた8項目について複数回答で選択を求めた。

⑤④で挙げた育児行動を全体としてどのぐらい積極的に行っているかの評定について「積極的」、「どちらかという」と積極的、「まあまあ積極的」、「どちらかという」と

消極的」、「消極的」、「わからない」の中から選択するよう求めた。

⑥日本で父親が育児に参加する割合が低いことについての理由を「わからない」、「その他」を含めた7項目の中から複数回答で選択を求めた。

⑦父親であること実感したときや子どもを一番愛しいと思うときについて自由記述で回答を求めた。

結 果

(1) 子どもと過ごす時間について

子どもと過ごす時間については、平日は3時間以上5時間未満という回答が最も多くつぎに5時間以上が多くあわせて60%であった。休日は13時間以上が最も多くつぎが10時間から13時間であわせて70%であった。本研究では子どもが保育園に通っていること、父親の平日の帰宅時間などからも考えて、父親の半数以上が勤務時間以外は家庭で子どもと過ごしていると考えられる。

(2) 子どもとの関わり方について

子どもとの関わりとして設定した項目は「子どもと一緒に朝食をとる」「子どもと一緒に夕食をとる」「子どもと一緒に風呂に入る」「子どものその日の出来事を聞いてあげる」「子どもの遊び相手になって一緒に遊ぶ」「子どもの身の回りの世話をする」「子どもの疑問にきちんと答える」の7項目である。

全体的に見ると、「いつもしている」の回答が最も大きい項目は「子どもと一緒に夕食をとる」、「子どもと一緒に風呂に入る」で両方とも58%であった。またすべての項目で「いつもしている」と「ときどきしている」と回答している割合を合計すると、「子どもと一緒に朝食をとる」項目が60%である以外はすべての項目で80%以上となっていた。「子どもと一緒に朝食をとる」項目については「ほとんどしていない」が全項目の中で29%と突出しており、父親と子どもの生活時間の違いが影響しているものと考えられる。しかしそれ以外の項目では「ほとんどしていない」と答えた割合は7%以下であり、8割以上の父親が日常生活の中で子どもと関わっていると考えていることが示された。

(3) 子どもとの生活の中で感じることにについて

子どもとの生活の中で感じることにについて肯定的な項目と否定的な項目を設定した。肯定的な項目は、「子どもを見てると元気づけられ、心の支えになる」、「子どもは家族の結びつきを強める」、「子どもを持って自分も成長できた」、「歳をとったとき、子どもがいると心強い」、「親になれたことが嬉しい」、「子どもが巣立っていくの

が楽しみだ」、「自分の中で最も重要なのは子どもだ」、の7項目である。否定的な項目は、「育児ノイローゼになる心境に共感できる」、「子どもを育てることが精神的負担だ」、「子どもを持つことは経済的負担が大きい」、「親であるために自分の行動がかなり制限され、子どもから解放されたいときもある」、の4項目である。

肯定的項目について、「いつもそう思う」と「ときにそう思う」の割合が90%以上で、特に「いつもそう思う」が50%以上になった項目は、「子どもを見てると元気づけられる、心の支えになる」、「子どもは家族の結びつきを強める」、「子どもを持って自分も成長できた」、「親になれたことが嬉しい」、「自分の中で重要なのは子どもだ」の5項目であった。これらから、ほとんどの父親が子どもに対して愛情を抱き、子どもによって親としての役割や自分自身の成長発達を認識させられ、さらにそのことが翻って子どもへの愛情の再確認に結びついている様子を示しているものといえよう。

その中でも「子どもは家族の結びつきを強める」について「いつもそう思う」と回答した割合は74%と最も高く、「全くそう思わない」と回答した人はいなかった。このことは、父親が子どもとの間の愛情や関わり的重要性を認めているだけでなく、子どもによって父親である自分と母親としての妻という役割が明確化し、ひとつの集団に所属する成員としての意識を高め、結果として子どもを含めた家族という集団を成立させていることを高く評価しているためと考えられる。

それに対して、「歳をとったとき、子どもがいると心強い」、「子どもが巣立っていくのが楽しみだ」については「いつもそう思う」、「ときにそう思う」と回答した割合は半数以上であったものの、先述の5項目よりやや低かった。これは保育園児を子どもに持つ父親から見れば、自分の老後や子どもが巣立つころというのは今から10年以上先の未来のことで想像しにくいことや、親が子どもに依存することを否定的に捉えたり、現在の幼い状態の子どもをより愛おしいと考えていることなどが背景にあるのではないかと考えられる。

否定的項目については、まず「育児ノイローゼになる心境に共感できる」、「子どもを持つことは経済的負担が大きい」、「親であるために自分の行動がかなり制限され、子どもから解放されたいときもある」の3項目で、「いつもそう思う」、「ときにそう思う」と回答した割合が50%を超えており、協力者のうちの半分以上の父親が子どもや育児にともなう実際の負担を過重であると認識する傾向が明らかになった。

子どもの存在を評価し愛情を強く感じるとする肯定的

項目への回答分布との違いも明白で、子どもを持つことで生じる負担について全く感じない父親がいる一方でも感じている父親もそれぞれ1割前後ずついることから、子どもへの愛情を実感しつつも、実際の子育てにおける身体的・経済的な負担の存在を認識している様子が窺えた。

また「子どもを育てることが精神的負担だ」の項目では肯定的項目と同様に、「全くそう思わない」「あまりそう思うことはない」の割合が81%を占めていたことから、子育てにともなう精神的な充実感や満足感と、実際生じている身体的・経済的な負担感や重圧感との乖離が同時に存在していることを示しているといえよう。

(4) 父親の育児参加について-性役割観の観点から

父親と母親の育児行動の分担について設定した項目を性役割の観点から見ると、それぞれ以下のような性役割観に対応していると考えられる。まず、「父親も母親と育児を分担して積極的に参加すべき」は父親と母親、男性と女性の役割について特に差異を意識しない「平等的性役割観」に、つぎに「父親は時間の許す範囲内で育児に参加すればよい」は父親、あるいは男性の役割について母親、あるいは女性とのあいだにある程度の差異を考慮すべきとする「限定的性役割観」に、そして「父親は外で働き、母親が育児に専念すべき」は父親・男は仕事、母親・女は家庭という従来の性役割観に基づく「伝統的性役割観」である。

それぞれの性役割観を支持する割合としては、平等的性役割観は55%、限定的性役割観は38%、伝統的性役割観は3%となっていた。「わからない」、「その他」は5%であった。このことから協力者となった半数以上の父親が平等的性役割観を持っていることがわかった。

同様の項目について、父親だけでなく未婚者や子どものいない男性も対象とした調査を行った2004年の栃木県の研究結果では、平等的性役割観を支持する男性は52%、限定的性役割観を支持する男性は44%、伝統的性役割観を支持する男性は1%となっていた。

今回の研究結果と栃木県の調査結果を比較すると、それぞれの性役割観の分布はかなり類似していた。さらに栃木県の調査では、女性の性役割観の分布割合も男性とほぼ同じで、平等的性役割観が56%、限定的性役割観が39%、伝統的性役割観が0.2%となっていた。つまり性役割観については男性・女性、未婚・既婚、子どもの有無、居住地域の違いを考慮しても、一般的に半数以上の人が平等的性役割観を持つことが示唆された。

またこの栃木県の調査は厳密な手続きを用いて行われた社会調査の一部であり、本研究でも同様の結果が得ら

れたことから、本研究での手続きと結果についての信頼性と妥当性が支持されたといえよう。

(5) 具体的に行っている育児行動について

育児行動を行っているかどうかについては、「お風呂に入れる」、「遊び相手をする」は8割以上、「ミルクを飲ませたり、ご飯を食べさせたりする」、「おしめを替えたり、衣服の着脱をする」、「寝かし付ける」、「保育園などの送迎」については5割前後の父親が行っていると回答した。

お風呂と遊び相手については(1)の結果でも8割以上の父親が行っていると回答していたのでほぼそれを裏付ける結果といえよう。しかし育児行動で欠かすことのできない基本的で日常的な事項、すなわち食事、排泄、着替え、睡眠の世話や毎日の保育園の送迎に関しては約半数の父親が行っているに止まった。

五十嵐・飯島(2001)の調査でも、父親の直接的な育児行動として本研究と同様の結果を得ており、父親の育児行動は入浴や遊びによるコミュニケーションなど比較的手間と時間のかからないものが中心で寝かしつけやおむつ替えなどを行っているなどの割合は低かった。このことについて、父親は子どもから笑顔など肯定的な反応が返ってきやすい、父親自身にとって喜びや楽しみとなる育児行動を選択的にしているからではないかとしている。

どの程度行っているかについては、「積極的」は18%、「どちらかという積極的」は35%、「まあまあ積極的」が36%で、9割近い父親が積極的に行っていると回答していた。食事や排泄など子どもが人間として生きていくための世話は一度たりとも休むことができない最も重要で負担も大きい育児行動である。父親の「どちらかという」と「まあまあ積極的」という回答は、内容的には育児「行動」というよりは育児への「参加」とみなす方が適切なレベルではないかと考えられる。

(3)で見た性役割観では、父親は積極的に育児行動を行い母親と育児を分担すべきとして平等的性役割観を支持する父親は半数以上であったが、実際に「積極的」に行っている割合が2割以下ということは、理想と現実あるいは本音と建て前の違いと見ることもできる。

さらに栃木県(2004)の調査においては、父親の育児行動・育児参加についての自己評定と母親からの実際の行動の評定にはずれがあることが明らかになっている。上記と同様の育児行動について父親が「いつも」、「ときどき」行っていると評定している割合は、母親から見て実際に「いつも」「ときどき」行われたの育児行動の割合に比べパーセンテージにして10ポイント以上

高かった。特に「食事」「排泄」「睡眠」の世話に関わる育児行動では、母親から見て父親が「していない」と評定する割合が、父親が自分自身「していない」と自己評定する割合のほぼ倍であった。これは日常不可欠な育児行動については、父親としては一度でもしたことがあれば「ときどきしている」と評定しがちなのに対して、母親からはほとんど育児行動を行ったと認識されていないことから生じる食い違いだと思われる。

(6) 日本の男性が育児に参加することが低い理由について

日本の男性の育児参加が低い理由について、一般的な意見として複数回答を求めた結果では、選択された割合が多い順で見ると以下の結果になった。「仕事に追われて、育児をする時間が取れないから」が71%と最も高く、続いて「育児は女の仕事と考えているから」が37%、「父親の後押しをするような行政の支援が少ないから」が26%、「育児の仕方がよくわからないから」が24%、「育児は面倒くさい」と考えているから」が16%、「その他」・「わからない」が8%であった。

考 察

本研究では父親の育児行動について検討してきたが、父親自身の評定では育児行動を積極的に行っているとする割合が90%近くにのぼり、半数以上の父親が家庭にいる時間を子どもと過ごしているにもかかわらず、実際の行動内容や行動頻度から考えると日常的で基本的な育児行動は母親中心であり、父親の育児はあくまで補助的なものであることが示唆された。

父親が育児行動に費やす時間が母親に比べて極端に短い原因として、育児期にある父親の労働時間が長いことが挙げられる。総務省労働力調査(2005)での男女別、年齢階級別の平均週間就業時間と週60時間以上就業者の割合では、女性は30歳代後半から40歳代後半にかけての就業時間が短くなっている一方、男性は30歳代が最も長く、約50時間となっている。また週60時間以上働く者の割合も男性は30歳代が最も高くなっている。(内閣府男女共同参画局、2006) 本調査の対象者となった父親も60%が30歳代であり、育児行動に対しても労働時間の長さが妨害要因となっていることが窺えた。また育児は父親と母親が平等に分担すべきと考える父親は約半数であったが、父親は時間の許す範囲で育児を行えばよいと考える割合も4割程度であった。さらに労働時間の制約が育児行動を抑制していると考えられる割合が70%であった。父親の育児行動を促進するためには、

まずなにより労働時間の見直しを行うことが必要であろう。

また本研究では、子どもとの生活の中で感じていることとして、子どもを愛情の対象とするだけでなく子どもを家族という集団の絆を深める存在として高く評価する傾向が見られた。森下(2006)は、父親は、子どもを持ち子どもを育てることで、愛情の対象が配偶者という個人から家族という集団に変化し、同時に自分の生活基盤を家族集団の中に確立する変化が生じているとしている。

育児行動とはたんに子どもの世話をするという個と個の関係ではなく、家族集団の形成という力動的な過程に関与することでもある。

しかし、子どもを持つことで身体的・経済的な負担を感じるとする父親も半数以上おり子どもは愛情をもたらすととともに負担を生じさせる存在でもあり、このような相反する感情が父親の育児行動に与えている影響や、子どもの成長にともなって父子関係や家族集団がどのように変化していくのかについてはさらなる研究を要するであろう。

さらに今後の課題として、父親自身による育児行動の評定だけでなく母親からの評定を加えることや実際の育児の分担をどのように行っているのかを明らかにすることが求められる。また、子どもの成長にともなって育児行動や家族の関係は当然変化していくが、子どもの幼少時における父親の育児行動がその後の家族関係にどのように影響するのかについても検討する必要があるだろう。父親が育児を行うことは子どもと母親によい影響を与えるだけでなく父親自身の成長を促す過程でもある。父親の育児行動を援助し促進することを可能にする要因をさらに明らかにすることは社会にとっても望ましいことといえよう。

謝 辞

本研究において調査にご協力いただきました父親の皆様方および保育園の先生方に深く感謝いたします。

引用文献

- 東洋・柏木恵子・Hess,R.D. 1998 母親の態度・行動と子どもの知的発達 東京大学出版会
Golombok, S. and Fivush, R. 1994 Gender development. New York: Cambridge University Press. (小林芳郎・瀧野揚三訳 1997 ジェンダーの発達心理学 田研出版社)

五十嵐久人・飯島純夫 2001 父親の育児参加への意識と育児行動 山梨医科大学紀要, 18, 89-93,
時事通信社 2001 父親の育児参加に関する世論調査 <http://www.crs.or.jp/5261.htm>
柏木恵子・若松素子 1994 「親となる」ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み 発達心理学研究, 5, 72-23.
加藤邦子・石井クンツ昌子・牧野カツコ・土谷みち子 2002 父親の育児関わりおよび母親の育児不安が3歳児の社会性に及ぼす影響：社会的背景の異なる2つのコホート比較から 発達心理学研究, 13, 30-41.

国立社会保障・人口問題研究所 1998 第2回全国家庭動向調査結果の概要 <http://www.ipss.go.jp>
森下葉子 2006 父親になることによる発達とそれに関わる要因 発達心理学研究, 17, 182-192.
内閣府男女共同参画局 2006 男女共同参画白書（平成18年度版） 国立印刷局
Pedersen, E. (Ed.) 1980 The Father-infant relationship. New York: Praeger. (依田明(監訳)
1986 父子関係の心理学 新曜社)
栃木県 2004 父親の育児参加促進事業に向けた県民意識・事業所実態調査結果（概要版）